

9 2007  
September

弘前大学

# 学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.156

## CONTENTS

- I 巻頭言 2
- II 特集  
「卒業生から在校生へ」 4
- III 研究室紹介 15
- IV 海外だより 16
- V けいじばんコーナー 18
- VI 編集後記 18



制作 教育学部学生 坂本理恵

特集  
「卒業生から在校生へ」



# I 巻頭言

# 過去と未来を繋ぐこと



副学長  
(教育・学生担当)

須藤新一

## 1 : はじめに

乗った飛行機が着陸態勢に入ると、きまって目を瞑った私の頭の中でひっそりとながれるメロディーがある。ビートルズの「ノルウェーの森」だ。10数年前ドイツのハンブルクやフランクフルト空港に着陸を体験したときに身につけた習慣だ。恥ずかしながら告白すると、作家である村上春樹の影響が現在私の一部になってしまったのだ。

ことほどさように、一人の人間は他者の影響を受けやすい。むしろ影響を受けずに成長することは不可能であるとさえ言える。皆さんもこれまでに多くの人の影響を受けたでしょうし、今後も受け続ける事でしょう。

さて、話は人からの影響の受け方である。文字通り、影響は受けるものであるから受動的であるのが普通でしょう。しかし、能動的側面は考えられないであろうか。今、例として格闘技の師弟関係を取り上げてみよう。その場合、先ず、弟子が師の

門を叩く。すなわち、弟子が師を選ぶのだ。何らかの基準に基づいて選ぶ場合が多かろう。だから、弟子は精神的には師と同じ基盤に立とうと努力しており、その上で師の技なり精神を盗むに邁進することになる。

人からの影響というものを棚ぼた式とは考えてほしくない。必ず、どこか比較的初期の段階で自分の選択が行われる。先ず自分が影響を求めて、結果として影響されたと気がつくのだ。従って、人に影響されることを否定的に捉える必要はない。むしろ、若い内は大いに他者からの影響を求めることを勧める。

## 2 : 温故知新

上で述べた影響の求め方であるが、私にはすぐに温故知新という言葉が浮かぶ。時代は変わっても、影響を求めるには、故きを温ねてみるのが取るべき手段の第一だと思う。では、具体的に故きを温ねてみるにはどうするか。それには、人（言語媒体）か著書（文字媒体）を

介することになる。内容的には論理か経験のどちらかであるが、ここでは話を単純化するために経験に限定する。

経験といえば、皆さんもこれまでに少なからず経験を積んできた。しかし、年長者に比べたら、その経験は量的にも質的にも十分でない可能性が高い。従って、年長者の経験に故きを温ねてみるのが妥当であろう。

先ず、年長者の講演を聴いて影響を受けた場合を挙げてみる。雪博士で有名な中谷宇吉郎先生がある高校で講演をした際、一人の生徒がその講演に感銘し、中谷先生と同じ道に進んだという。なお、中谷先生は寺田寅彦先生の研究指導を受け、恩師として敬愛していた。従って、寺田先生の影響を中谷先生は受けたことになり、上記高校生は寺田先生の孫弟子ともいえる。科学の世界では上に示したような例は数限りなくある。ノーベル賞受賞者等による青少年の為の講演会が多数開催される所以である。



次に著書を通して年長者の経験を知る場合を取り上げてみる。ギリシャの過去に遡るために、岩波文庫を探すとセネカやキケロ等世界の遺産ともいえる内容に触れることができる。日本の著書に目を向けると、夏目漱石の「三四郎」など、いわゆる皆さんにとってもはや古典とも思われるものがある。さらに時代を下ると寺田寅彦随筆集や中谷宇吉郎先生の「目に見えないもの」なども多くの若者達を科学の道に誘導した。

さて、ここで戯れに2000年以降のベストセラーの中から一つだけを私の独断で取り上げてみる。

2000年：人生の目的

(五木寛之)

2001年：声を出して読みたい日本語

(斎藤孝)

2002年：生きかた上手

(日野原重明)

2003年：バカの壁 (養老孟司)

2004年：上司は思いつきでものを言う

(橋本治)

2005年：生協の白石さん

(白石昌則)

2006年：国家の品格

(藤原正彦)

2007年：鈍感力 (渡辺淳一)

皆さんは上記の著書を何冊購入したことがありますか、または著書名を何冊聞いたり見たりしたことがありますか。なにもベストセラーだからといって皆が読まなければならないことはない。自分の好みに合わない著者もいれば関心の持てない内容もある。

以上のように、講演を聴いても著書を読んでもそれらの中身が自分の気持ちにフィットしない場合、それは自分を取り巻く環境が講演や著書の中に示されたそれと異なることに原因を見いだされることも多いので

はなかろうか。自分の世界とは異なるとの思いが心にくすぶると講演や著書の中味に溶け込めない。

### 3：先輩の経験

以下に示すことが本稿の要諦である。

現在弘前大学で勉学に励む皆さんの自然環境は過去数十年に渡って変化がないと見てよかろう。細かく観察すれば日本社会の変化に伴っての変化が垣間見られことも事実である。しかし、それすらどこかに必ず過去の痕跡が見いだされるはずであるから他所の変化に比べると無視できよう。従って、皆さんと同様な環境下で勉学に励んだ方々が多数いたのだ。皆さんと同様に桜の下での喜びをまたは吹雪の中での苦しみを味わった方々が多数いたのだ。言うまでもなく皆さんの先輩方です。これまで長々と具にもつかぬ事を並べてきたが、先輩方の経験に影響を求めようというのが私の提案である。弘前大学学生としての皆さんに一番近い存在は先輩の方々だから。

### 4：将来は先輩として

これまで温故知新の温故について記してきた。以下では知新についてである。先輩方の経験をよく咀嚼し、飲み込むか否かを自分でよく考えてみなければならない。諾となれば飲み込み、否となればはき出す勇氣を持たねばならない。このような過程を何度となく繰り返し、ついには自分のものを形作って下さい。そして、そのような過程で得られたものをいつか機会があったら後輩に示して下さい。弘前大学の歴史は今後も続きます。過去の先輩の経験を求めてそれを未来の後輩に引き継ぐのは皆さんなのです。弘前大学の過去と未来を繋ぐのは皆さんなのです。

皆さんは弘前大学という悠久の大河の一滴にすぎないかもしれませんが。されど、一滴一滴の皆さんが大河を確かなものに行っているのです。大河の枯渇を防止するのは皆さんなのです。このことを今後とも是非忘れずに心の片隅に秘めておいて下さい。

### 5：さいごに

本稿では、著書として小説類の紹介は夏目漱石を除いて割愛した。しかし、「はじめに」で例示したように私は多くの小説の影響を受けてきたし、今後も受けるはずだ。皆さんも誰はばかりことなく小説も手にしてみてください。最後に、あくまでも他者から影響受けるという言葉に違和感を持つ人は他者から吸収すると考えてみたらいかか。人間はだれでも他者の経験(知識や知恵)を吸収する機能と自分の経験を放出する機能を同時に持っている。二つの機能は合わせると100%になる。若い内は吸収の方が70とか80%の大勢を占め放出の方は少ないのですが、年と共に放出の方が増えて、そのうちにその割合が逆転すると考えてみたら私の話が比較的分かりやすくなるのでは。

最後の最後に、蛇足であるが私が影響を受けた著書を列記する。

何でも見てやろう (小田実)

ボクの音楽武者修行

(小澤征爾)

若き数学者のアメリカ

(藤原正彦)

深夜特急

(沢木耕太郎)

上記の著書を読み、夢を海外に馳せたものだ。私の夢が叶ったか否か、知りたい方は私の所に足を運んでみてください。

## II 特集「卒業生から在校生へ」

## うたかたの日々

(株)バンダイナムコゲームス  
CS海外事業部ゼネラルマネージャー

兵藤 岳史

(経済学科 1983年卒業)

♪都も遠し津軽野にい 溢るる精気  
若人のお…。弘前大学の卒業生という  
より北溟寮の卒業生といったほうが正  
解に近い私が、調子のいい時につい口ず  
さんでしまうのがこの寮歌です。5年間  
いました。日本全国津々浦々から学部も  
違えば、興味も思考回路も違う連中  
200名が寝食を共にし、友情に結ばれ  
て過ごした寮生活…といえは格好よす  
ぎです。ドロドロした一面もあり、ノー  
天気な一面もあり。ヒステリックな集  
団心理と青春期特有の孤独感の狭間、哀  
しさ・優しさ・狂躁・沈殿…混沌とした  
生活でした。でもだからこそでしょう  
か、今でも一声かければ元寮生たちはた  
ちどころに20人以上集まり、当時のよ  
うにコンパをします。場所はあの北溟  
寮の談話室や西弘の「はっばち」ではな  
く都内の居酒屋に変わってしまいまし  
たが、彼らとの友情は終生つきることは  
ありません。

ふまじめな学生だった私ですがゼミ  
だけは別でした。80年4月中澤勝三先  
生の西洋経済史ゼミを希望したのは私  
ただひとり。先生と1対1でした。フラ

ンク『従属的蓄積と低開発』、ウォーラー  
スステイン『近代世界システム』、本山美  
彦『世界経済論』…学問の世界の大き  
さにおののくとともに、自分から勉強す  
ることがいかに楽しいことであるかを  
知った日々でもありました。やがて先生  
は結婚早々81年の半ばから文部省のプ  
ログラムでベルギーへ留学されてしま  
い、その間、鈴木和雄先生のゼミに拾  
ってもらいました。『資本論』忘れられま  
せん。あの頃は鈴木先生も若く、一緒にな  
んど呑んだことやら。

卒業と同時にナムコに入社してから  
もう24年になります。いろいろな仕事  
をしました。初めはゲーム企画。たまた  
ま休暇でマレーシアに旅行したとき椰  
子が茂る田舎の村で自分がつくった  
ゲームを遊んでいる現地の子どもたち  
を見た時は感動したものです…それは  
中国製の海賊版でしたが。当時は企画・  
プログラマー・デザイナー・サウンド、  
合計4名でゲームを製作するという牧  
歌的時代でした。21世紀の今では100  
人を超えるプロジェクトが生まれ10億  
円以上かけて製作されるゲームも稀で  
はありません。ただし、いずれにせよコ  
ンテンツ製作で大事なものは人間に対  
する理解力です。

新卒採用の仕事をしていた時期もあ  
ります。弘大からの入社希望者はそれ



ほど多くなく寂しい気持ちがあったもの  
です。北溟寮の後輩がきたら「エコひい  
き」して2つくらい面接を飛ばしても  
いいくらいに思っていました。

96年から3年間にわたったアメリカ  
子会社勤務以来『日本製のビデオゲーム  
を海外に広げること』をテーマに仕事を  
しています。遊びとは極めて文化的な  
営みでもあり、異文化を理解し=人間を  
理解しなければ国境を越える遊びは生  
み出せません。

だからこそ、今になって弘前で暮ら  
し・学び・遊んだ日々がどれほど貴重  
であったか、痛切に感じています。大学  
はそれまでの人生で出会ったことのない  
思想に触れ、想像もしなかった他者と  
出会い、考えてもいなかった自分の可  
能性を発見する場でした。

在校生のみなさんの弘前で暮らし  
が、精神的に豊かであることを祈ってや  
みません。

## 「コンパクトシティ」の街づくり



白石市議会議員

沼倉 昭仁

(経済学科 1997年卒業)

こんにちは。97年3月、弘前大学人  
文学部経済学科(現:社会システム課程)  
卒業の沼倉昭仁です。現在は、宮城県  
の白石市で、城下町ならではの歴史・人  
情をテーマに、「街づくり」に取り組んで  
おります。

現在、私の指針となっているのは、全  
国から注目されている青森市の「コン  
パクトシティ」の街づくりです。中心市  
街地の空洞化現象が、全国各地で顕著  
に見られ、自動車中心社会(車社会)に  
なり、郊外に住宅地開発が進み、商業  
施設や公共施設も広い敷地を求めて郊  
外に移転

する傾向にあります。一方、旧来からの  
市街地は、車社会にしては、街路の整備  
も不十分であり、市街地の開発も進ま  
ず、特に、昔から続く自然発生の商店  
街は、道も狭く渋滞している、駐車場  
も不足している、などの理由で、活力  
がなく衰退し、いわゆるシャッター通  
りが生れています。このような課題に  
対し、無秩序な郊外化を抑制し、市街  
地のスケールを小さく保ち、歩いてゆ  
ける範囲を生活圏と捉え、買い物をする  
ところ、住むところ、働くところを、  
コンパクトにまとめる、「コンパクトシ  
ティ」実現のため、白石市議会議員の  
一期生として、日々活動を続けており  
ます。

私のこの活動は、実は、弘前大学で  
執筆した一枚の研究ノートから始まり  
ました。それは、資本主義の発達した原  
因を、生活必需品である食糧に代表さ  
せて、その生産と自給という観点から、  
特に、人類の経済生活のなかで何世紀  
にもわたって主要な役割を果たしてきた  
穀物の生産とその自給という側面から  
考えてみるものであり、法政大学大学院  
社

会科学研究科に進学して着想を膨らま  
せてきたものでありますが、その方向性  
を決めたのは、弘前大学人文学部経済  
学科(現:社会システム課程)の中澤勝  
三教授との出会いでした。白石で、現  
在、私が取り組んでいる「コンパクト  
シティ」をテーマにした街づくり、また、  
その基礎にある研究ノートは、中澤勝  
三教授との出会いがなければ実現しな  
かったものでした。

ヒトは、大学まで、何故学ぶのか?高  
校までの授業では、人類が有史以来発  
見し培ってきた知識を短期間で知ること  
ができる。大学では、その知識を自分  
で組み替えたり、新たな知識を発見し  
たりすることが求められている。とする  
なら、問題発見の目=問題意識の感覚  
を身につけることが大学の意義である  
と思えます。その問題意識のもとに、  
正しい知識を使ったり、組み替えたり  
することが「仕事に就く」ことであり、  
そこに人類への「貢献」がある。私の  
「仕事」の原動力、活動の原風景は、  
今でも「弘前」にあると言って良い  
のです。



# 大学生生活で得たものを通して



独立行政法人国際協力機構  
日本人材開発センター  
事務局

**工藤 倫代**

(情報マネジメント課程 2005年卒業)

2005年3月に国際協力ゼミを卒業し、早いもので3年が経ちます。私は、国際協力ゼミ卒業後、上智大学にてユネスコ国際会議の事務局に勤め、現在は独立行政法人国際協力機構(JICA)の日本人材開発センター(以下、日本センター)という部署で事務局を担当しています。

日本センターは、世界に9カ国10センターを抱え、現地市民を対象に日本的ビジネス運営手法や日本語の授業・両国の相互理解促進イベントの開催等を行い、日本と各国の架け橋となる役割を担っています。また、各国の状況やニーズに合わせた取り組みもっており、私の担当国の1つであるモンゴルでは、コ

ンピューター授業の開催や日本語ラジオ講座の開始によって、日本センターの利用率が大きく増えました。こういった現地のニーズに合わせた取り組みが評価され、今では現地市民にとって日本センターの存在意義が大きくなってきています。私は、そのような各国日本センター内の運営やシステム改善等のために、日々関係者と密に連絡を取り合いながら、本部の事務局としてサポートを行っています。

事務局運営の大きなミッションの1つとして本邦研修がありますが、先月ラオスとウズベキスタン日本センターから現地スタッフの広報担当者が1名ずつ来日し、研修を行いました。地方での「国際交流展開手法」や「ネットワーク形成」を学ぶために、スタッフとともに新潟県長岡市へ同行しましたが、過去3度の復興を遂げている長岡市は、防災の危機管理能力が高く、市民の結束力があり、国際交流活動が盛んな地域でした。中越地震で廃校となった山古志村の場所で中高生の合宿を行い、そこでの助け合い精神を「日常化」し、「国際化」するという活動も行っているそうです。「市

民の心を1つにする」というコンセプトのもと、積極的に人材育成に取り組んでいる姿勢が、市民一人一人の国際協力への意識の高さにつながっているのかもしれない。

大学のゼミ活動で、新潟ボランティアセンターのバザーイベントへ参加した時、人的ネットワークの広さと強さを感じたのですが、長岡でも同じような「市民力」を感じました。また、大学1年時から「あおもり開発教育研究会」で活動を行っていた私は、青森とは異なる、長岡ならではの地域性を生かした国際交流活動を目の当たりにし、改めて地方の国際理解・開発教育のあり方について考えさせられる研修同行となりました。

弘前大学では、ボランティア活動や留学を通して様々な経験を得ただけでなく、ゼミでの研究や指導教官からの多くの教えをいただき、大学でのすべての学びが今の私にひとつにつながっています。是非、弘前大学で得られる様々なチャンスを活用し、充実した大学生活を過ごしてください。

# 満喫と企みと



商工組合中央金庫

**西谷 拓真**

(情報マネジメント課程 2006年卒業)

在校生のみなさん、こんにちは。私は2006年3月に弘前大学人文学部を卒業し、今は商工中金という中小企業への融資を専門とした政府系金融機関で働いています。

私の主な仕事は大きく分けて2つ。中小企業の社長や経理担当の方と情報交換を通してニーズを探り企業を支援していく営業と、その企業の信用力を調査する内部作業です。

まずお客様から決算書や関係資料をいただき、業界動向や企業の業況、今後の見通し等を伺い、その企業が今どのような状況にあり今後どのように変化していくのかを調査していく事により、お客様に対する知識を深めていきます。

知識を深めた上で交渉を行い企業の持続・成長を金融面でお手伝いし、その

対価をいただくのが営業の大きな部分ですが、資金の融通が全てではありません。経営上の問題についてのアドバイスや債券の販売、融資に関連した取引(例えば為替・オプション・ビジネスマッチング)等、お客様と多様な取引を行います。その多様な取引を円滑に進める為に、私達は信頼をととても大切にしています。信頼関係を築いてこそ互いに笑顔で話す事ができ、お客様は我々に仕事内容や経営について詳しく教えてください。そして会話に隠れたニーズを探り、新たな取引の提案へと繋げていくのです。こうしたお客様とのコミュニケーションに銀行員としてのやりがいがあるのではないかなと思います。

在校生のみなさん、この文章を読んでいるあなたは就職について既に考えているのでしょうか。大学を卒業し、就職をして社会に出るとい事は人生において何かしらの節目となります。その節目をより良いものにする為に、大学時代という今を満喫してほしく、社会に出たらさらに満喫してやろうと企んでほしいです。大学時代にしか経験できない事というのがたくさんあります。研究に没頭する事、友達と飽きる程遊ぶ事、才能を磨く事、冒険する事。全てが、社会に出てからやるそれとは全く違います。満

喫してください。又、社会人としての日々を今以上に充実させたいという思いを胸に抱いてほしいと思います。将来イメージを持ち、イメージに近づきたいという気持ちで就職を考えれば、きっと近づけます。イメージを抱かずにいるより必ず。言葉は悪いかもかもしれませんが、企んでほしいのです。

最後に。関東、特に東京の就職活動は早いです。職種によっては3年の夏には行動を始めた方が良いものもあります。県内就職を考えている方でも、本番の為の準備運動として東京の企業説明会参加や履歴書送付をしてみるのの有効です。興味ある仕事について、どのような日程で就職活動していけばいいかをまず調べてみてください。調べなければわからない部分というのはたくさんあります。又、興味のない仕事にも一度目を向けてほしいと思います。新たな発見、イメージを変える発見があるかもしれません。ここで話した銀行員の仕事内容も、仕事のほんの一部です。さらに調べれば、きっと新たな発見があるでしょう。知っている仕事が全てではありません。調べていく度に興味が膨らむ仕事を見つけてください。

## 熟成VS新鮮

青森県立田子高校 教諭

豊川千春

(中学校教員養成課程 1996年卒業)

弘前大学教育学部を卒業してから、もう干支が一回りしてしまった。その間に、弘大では校舎・構内、学部や学科の名称、入試のシステム、立派な駐車場や駐車ゲートや自動ドアなど、実にたくさんのもが変化していて、一昔前の学生にとっては驚くことばかりだ。携帯電話なんてものはまだ普及しておらず、卒論

のデータ分析のためにロータス123なんて使っていた時代が、やけに遠く感じる。

現在教員をしているが、この10年ちょっとで教育を取り巻く環境も大きく変わった。大学時代に得た知識やデータの中には古くて今は使えないものもあるので、現場に出てからも新しい知識や技術や情報には常に敏感でなければならない。なぜなら、生徒は生物(なまもの)だからだ。生物が傷まないようにするには、鮮度を保つことが肝心だ。ただし、新鮮さを証明するためには古いも

のとの比較が必要であるから、つまりは過去のデータや経験は決して無駄にはならない。長い年月あためて熟成させた過去のものにも必ず出番はあるのだ。

今、私にとって新しいと思えるものがみなさんにとって普通、または古いと感じるように、みなさんにもこの先新しいと思えるものが現れ、時代の流れや変化を感じるようになるだろう。自分の中で大事に熟成させ守っていく姿勢と、新鮮なものを柔軟に受け入れる姿勢とのバランスをうまくとりながら頑張る欲しいと思う。

## 大学生生活を振り返って

(株)まちづくり計画設計 青森支所

中田憲飛人

(家政教育専修住居学専攻 1998年修了)

私は現在、「まちづくり」に関わる仕事をしています。景観計画、住宅計画といった県や市が作る様々な計画づくりを手伝う仕事です。教育学部卒の私が、なぜこのような職業に就いてしまったのか。

修士論文のテーマを決められずにいた大学院1年生の頃、ある先生が某村の住宅団地に建てる集会所を考えるワークショップに連れて行ってくれました。

そこには、団地に住む予定の人達が集まり、「集会所でこんな事がしてみたい」と絵を描いたりしながら楽しそうに意見を出し合っていました。「こんな話し合いの仕方もあるんだなぁ」とカルチャーショックを受けた私は、その後、私を現場に連れ出してくれた先生のもと、商店街の再生や公園づくり、川づくり等、様々な現場に出て行き、「まちづくり」にのめり込んでいくこととなります。

その中で、行政関係者だけでなく、建築家、グラフィックデザイナー、消防士等々、住民の意見を楽しく引き出し、形にしていくことに取り組む「まちづくり人達」に出会いました。「人々の想いを

形にしていく」「こんな人達と一緒に仕事をしてみたい」、そんな想いから今の職業を選んだのだと思います。いまだに一緒に酒を飲んだり、相談にのって頂いたり、ここでの出会いは私の財産の一つになっています。

色々な人達との出会いが、私の人生を変えていく。それは大学の先生であり、先輩や後輩、それに学外の人達。大学の中だけでなく、様々なフィールドに出て行くことで、出会い、感じることもあるかと思っています。在校生の皆さんが色々な場所に出て行き、自分の進みたい道を見つけれられることを願っています。

## 大学で教えるということ

尚綱学院大学  
総合人間科学部  
生活環境学科 講師

馬場たまき

(家政教育専修住居学専攻 1998年修了)

修士課程を卒業後、短大の教員として勤めて今年でちょうど10年になる。短大では主に住居学関連の講義や実習、ゼミを担当し、学外ではNPOに所属しながら住環境教育の実践研究を続けている。大学時代、指導教官から「より多くの人へ住教育を伝えることが可能な研

究職も考えてみては」との助言を頂き、大学で教える道を選んだ。

しかし、10年が経過しても悩み続けていることがある。それは学びの楽しさを伝える難しさである。学生たちの多くは「広く浅く学ぶ」ことに慣れ、「深い学びのその先」の充実感を知らないのではないかと感じるのだ。こたつから出ようとせず、手の届く範囲で用事を済ませようとする時の光景とちょっと似ている。

私自身は修士課程時代に住環境教育や参加型まちづくりに関する研究調査で北海道、東北、関西、北陸などを巡る機会を得、文化も年齢も異なる多くの人に交ざり、語らい、議論する経験を重ねるうちに研究の面白さを体得し、のめり込んでいった。この多方面から物事を

捉えて考えを深化させる学びの楽しさを、ぜひ今の学生にも伝えたい。とはいえ「深く学ぶことは楽しいよ」とストレートに言ってわかってもらえるものでもない。そこでここ数年は、五感をフル活用して「見る、聞く、やってみる」機会を多く設け、学生の自発的な学びをさりげなく演出できるように心がけてきた。その効果は学生に聞いてみないと分からないが、まずは、私自身が多方面へアンテナを張り、色々なことを吸収して研究を楽しく続けている姿を見せることが大切だと思っている。そしてこれからも「こたつの中から出てみようか」と思えるような機会を学生にどんどん提供していきたいと思っている。



## 三つの学び

横浜市立三ツ沢小学校 教諭

阿部 聡

(生涯教育課程地域生活専攻 2004年卒業)

私は、教職について4年目。今までの人生をふり返ってみると、やはり弘前大学で過ごした四年間は、とても自分の人生において大きく影響している。それは、恩師との出会い、かけがえのない友人との出会い、他の大学では学べないようなカリキュラム、充実したアルバイトなど、数え切れないほどの素晴らしい体験があったからこそだと考えている。その中でも特に、ゼミでの出会いや体験は、自分を大きく成長させた。

何もわからずに研究室に入った二年生。当時の三・四年生の背中が大きく、自分には到底たどり着けないように感じた。文献をまとめたレポート発表、

毎月行われる卒論発表、商工会議所を中心としたまちの方々とのかわりなど、機敏に動き、貪欲に学ぼうとするその姿勢は尊敬に値するものであった。

自分も先輩方の姿を追いかけながらも必死に取り組んだ卒業論文。そして、何度も何度も自分の志望動機を確かめながら学習した、教員採用試験。自分の目標を知人やゼミの後輩に話して周ることで、自分の逃げ場を無くし、自分自身を追い込む方法でひたむきに努力を重ねた。そして、自分の目標に向かって一步一步確実に学習を進めた。時には、ゼミの仲間と持論について語り合い、時には激しく意見をぶつけた。指導教官にもアドバイスをいただき、役所の方々からは学生生活から学び得ない視点からの意見もいただいた。そのような中で自分の考えは深まり、夢に向かって大きく前進していくことができた。自分

の四年生での経験は最も大きなもので、その経験は確実に力になった。

目的を確認しながら一つひとつ確実に、自分を常に前向きにさせるようにコントロールしながら生活していくこと——。

仲間を大切に、出会いを大切に生活していくこと——。

夢は逃げるものではない。逃げるのは自分である、ということ——。

これが、大学四年間で自分が学んだことであり、今も大切にしていることである。

稚拙な内容ではあるかもしれないが、この文章を読んで下さった方々の心に届き、何らかの行動に結びついたとしたならば、これ以上の感激はありません。今回は私の文章を読んでいただき本当にありがとうございました。

## 心が変われば態度が変わる



青森市立甲田中学校 教諭

福岡 優太

(生涯教育課程地域生活専攻 2004年卒業)

教員として2年目。今年も部活動の県大会や研修などで忙しい夏休みがやってきました。毎日の仕事に追われながら、今までのことを振り返ってみると「なぜ、自分がこの仕事をしているのだろう。」と思うことがあります。

私は教育学部の卒業生ですが、「教師になりたい!」という強い気持ちはなく、「公務員か教師か…ある程度地位の

ある仕事がいいな。」くらいにしか考えていませんでした。ですから、大学4年時と卒業した翌年までは公務員試験と教員採用試験、東証一部上場企業の入社試験などを受験し、もちろん「不合格」という具合でした。

ところが、「どうしても教師になりたい!」と思う出来事がありました。それは、現在の学校に勤務する前に1年間講師をした特別支援学校(当時は養護学校)でのことです。最初にお誘いをいただいたときは「何で自分が?」と思いましたが、当時フリーターだった私は「とりあえず」と思い、引き受けました。

しかし、特別支援学校に行ってみると、そこは自分の想像していたものとは全く別世界でした。何らかの病気で通常の小中学校に通えない子どもたちが、病気と闘いながら生き生きと毎日の学校生活を送っているのです。これまで

いい加減な毎日を送ってきた自分が「先生」と呼ばれ、子どもたちからも他の先生方からも必要とされているのです。

「もう、この道しかない!」—仕事に社会的なステータスばかりを求めていた自分を大きく変える出来事でした。幸い、当時勤務していた学校の先生方の強力なバックアップもあり、約55倍という他教科では類を見ない倍率の中学校社会科の採用試験に合格したのです。

最後に、在校生の皆さんへ。ヒンドゥー教の教えで、プロ野球楽天の野村克也監督の著書にも書かれているこの言葉を紹介したいと思います。

心が変われば、態度が変わる。  
態度が変われば、行動が変わる。  
行動が変われば、習慣が変わる。  
習慣が変われば、人格が変わる。  
人格が変われば、運命が変わる。  
運命が変われば、人生が変わる。



(株)サウンド・アーキテクト所員

佐藤 亜矢子

(生涯教育課程地域生活専攻 2005年卒業)

私は現在、地元の設計事務所に勤めています。

弘前大学教育学部を卒業して設計事務所に勤めるというのは誰もが驚きます。

私は入学した時から卒業後は建築の仕事がしたいと思っていました。

しかし、教育学部でどうやって建築の勉強をしていいのかかわからず、建築関係の研究室の北原啓司教授に相談し、今建築の仕事ができるのも北原先生がきっかけです。

大学在学中は建築の勉強をし、休みの時には建築物を見て回ったり、現在勤めている設計事務所でもアルバイトをしたりと手探り状態で建築について学びました。

社会人になって、学生時代もっというばい勉強すればよかったと思うときがあります。大学生は時間を作ろうと思

えばいくらでも自由になる時間を作ることができます。社会人は拘束されることが多く、なかなか自由な時間を作るとは難しく、大学の4年間というものはとても貴重です。

私が今の仕事を楽しくできるのは、大学4年間での様々な経験を通して一番興味がある仕事を見つけることができたからだと思います。

大学の4年間はあっという間です。その中でより多くのことに興味・関心を持ち、積極的に行動・経験し、大学生生活を充実したものにして下さい。

また、人との出会いもとても貴重なものなので大切にして下さい。

## 想像力と行動力で夢の実現へ

鳴門教育大学  
高度情報研究  
教育センター  
准教授

林 秀彦

(理学部情報科学科 1998年卒業)



私は1998年3月に弘前大学を卒業後、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科に入学し、2003年3月には同大学知識科学研究科の博士後期課程にて知識科学の学位を取得後、国際電気通信基礎技術研究所(ATR)に専任研究員として2年間、甲南大学知的情報通信研究所に博士研究員として1年半を経て、昨年9月より、鳴門教育大学の助教授として着任いたしました。現在、鳴門教育大学高度情報研究教育センターの准教授として情報教育分野を主に担当しております。

研究は、知識科学という比較的新しい

切口から、人間の特に視覚・脳と情報システムに関する研究を広く行っております。これまでに脳波を指標とした高品位映像の画質評価に関する研究、眼球運動計測による英語文章の読解学習支援システム、前庭系と視覚系の相互作用による基礎特性の研究、心理測定曲線を用いた欠陥検出確率評価法の研究などが論文としてまとまっております。この他にも興味の範囲は比較的広く、自動車運転ドライバーの動作解析や脳機能解析、可搬性を考慮した遠隔授業観察システム、情報教育研究、技術や文化の創造的継承などにも取り組んでおります。私は情報科学科の雨森研究室出身ですので、認知システムや人間の情報処理に関するテーマを多く扱っておりますが、今後も広い視点で研究を進める所存です。なにか関連するテーマで共同でできることなどございましたら、ご一報いただけましたら幸いです。鳴門は、京阪神からは四国の玄関口にありまして、関西空港からバスで約2時間半です。東京

からは徳島空港も便利です。機会がございましたら是非お立ち寄りください。

総合大学である弘大は、多様な価値観が集い、己の視野を広げる成長の機会を与えてくれます。私の所属した吹奏楽団やバイト先の精米所での経験を懐かしく思うとき、同時にその頃の多様な経験が今によく活かしていることに気づかされます。

人に与える時間は有限です。その中で何を考え、どう行動するか。それは無限の組み合わせです。現実には無限の思考がストップされることもありますが、それ以上に在校生の皆様には計り知れない可能性が秘められています。他者を思いやれる想像力と、思い立ったら即実行できる行動力。一見して相反するような2つの力をも身につけて、夢の実現へ邁進されることを期待します。まだまだ未熟な小生にも、そう言い聞かせながら、失礼いたします。がんばれ弘大生！

## 5000人分の？人でしょうか

弘前大学大学院理工学研究科  
知能機械システム工学専攻

加藤 浩司

(知能機械システム工学科 2006年卒業)



この原稿の依頼を受けて初めて「学園だより」を読ませていただきました。一体どれだけの在校生の方に呼んでいたかかわかりませんが、読まれた方で私を見かける機会がありましたら一声お掛けください。統計を取ってみたいです。

この原稿を執筆するにあたって、私のこれまでの大学生活を振り返ってみると、随分貴重な時間を無駄にしてきた

ような気がします。確かに高校以前よりは自由な時間はたくさんできたのですが、“面倒くさい”の一言で結局なにもしてきませんでした。就職も決まり来年から社会人となる今、それを強く感じています。こんな私の後悔から何かみなさんに伝えられることがあるとしたらそれは、ちょっと勇気を出して色々なことに挑戦してみてください、ということだと思います。『思い立ったが吉日』ということわざもありますが、まさしくその通りで、つべこべ言わずにやってみるのが一番だと思うのです。そうすることによって色々先延ばしにしなければならぬこともあるでしょう。しかし、そんなものは後で頑張ればなんとかなります(笑)。金銭的に余裕があるのであれば、留年することになったとしてもかまいません。なんだか無責任な

ことを言っているように聞こえるかもしれませんが、私の23年間の経験上、それがベストだと思うのです。

人は年齢を重ねていくうちに色々な責任を抱えていかなければなりません。それは誰かに支えられている側から、誰かを支えていく側へとシフトしていくことなのだと思います。我々大学生は年齢的に言えば大人の部類に入りますが、多くの方々を支えられています。在校生のみなさん、好きなことを納得がいくまで存分にやってください。しかし、誰かに支えられていることを忘れないでください。そうすればきっと、もっと思い出に残る大学生活を送ることができると思います。『後悔先に立たず』ですよ。



## 卒業生から弘大生へ



弘前大学財務部  
経理課

佐々木俊之

(電子情報システム工学修士課程 2007年修了)

新しい学年が始まって数ヶ月たちますが、新入生の方々も生活に慣れてきたと思います。学生の皆さんに言いたいことは学生生活を楽しんでくださいということです。私は社会人になって数ヶ月たちますが、学生のとときの違いは、自由に使える時間の多さだと思います。

1、2ヶ月の休みがあるというのは学生のうちだけです。学校の勉強に限らずに色々なことに興味を持ち挑戦してみたらどうでしょうか。例えば旅行してみたり、何か資格を取ったりするのもいいかもしれません。もちろんサークルや部活など一つの事に精一杯打ち込むのもいいでしょう。その挑戦が成功すればもちろん自身にとって糧になるでしょうし、たとえ失敗したとしても経験したことは無駄にはならないと思います。

皆さんにもう一つ言いたい事は目標を持って行動するという事です。目標を持って行動することは大学の勉強においても、普段の生活においても大事

だだと思います。目標を達成しようとするにはどうすればよいか考えることで計画的に物事を進めていけるでしょうし、自分自身今何をすべきか理解することができると思います。

大学生活も3年4年になってくると授業も専門的な科目やゼミなどが始まるのでより自らが望む勉強をすることができるようになると思います。そしてその頃になってくると就職活動が始まったりして、より生活が慌ただしくなるでしょう。時間はあると思っていてもあっという間に過ぎてしまうものですので、充実した大学生活を送れるようにがんばってください。

## 弘大生へ

弘前大学財務部契約管理課契約管理グループ  
山口和佳子

(数理システム科学修士課程 2007年修了)

私は、平成13年に弘前大学理工学部数理システム科学科に入学し、17年度に弘前大学大学院へと進学して、幾何学を専門に勉強していました。そして、この3月に修了し、4月から弘前大学に就職し、財務部契約管理課に配属されました。

今、社会人になり学生時代を振り返ってみると、やり残したことがたくさんあるという感じがしています。大学に入ると、高校生までとは違い自分で授業を選択するなど、自分の生活を自分で管理するという面が強くなっていきます。その分、自分のしたいことに費やせる時間も増えるので、上手に時間のやりくりをしないとあっという間に時間が過ぎてしまいます。もっと貴重な時間を有

意義に活用していればよかったと思います。

しかし、学生だからこそ経験できたこともたくさんあります。中学校へ教育実習に行ったことや、養護学校に実習に行ったことで、私は多くのことを学びました。普段の生活では経験できないことや、いろいろな人との出会いは今の自分の糧となっています。特に、学生のとときのアルバイトではたくさんのことを学ぶことができました。仕事をしていく上でどのように効率よく働くか、また、気持ちよく仕事をするにはどのようにすればいいかなどを考えるようになりました。アルバイトとはいえ、仕事をする中でたくさんのことを学ぶことができました。そこで良い先輩とめぐり合えたからこそ、その先輩の良いところを見習い、自分も社会人になったらこの人のように仕事をしていきたいと感じました。仕事の内容は違っても、そう

いった経験が今の仕事にも役に立ち生きてくる部分がたくさんあります。そういった体験から、学生のとときに大切なのは色々なことを経験してみて、それに打ち込むことだと思います。たくさんのかをを経験することで、様々な人に出会い、そこで相談にのってもらい、良いアドバイスをもらうことができます。社会人になると、そういった経験が役に立つことが多々あると思います。もちろんアルバイトに限らず、部活やサークル、また自分の研究分野についてもいいので、視野を広げて見ることを将来の役に立つと思います。

最後に、学生のとときほど自分の時間を自由に使えるときはないと思うので、今だからこそできることを見つけて積極的に挑戦し、学生時代を無駄にせずたくさんのかをを経験してみてください。そして思いっきり楽しんでください。

# バッタアレルギー

神戸大学大学院 自然科学研究科  
博士課程3年

前野浩太郎

(生物生産科学科 2003年卒業)

私はバッタアレルギーです。バッタが皮膚の上を歩くと、その足跡通りにジンマシンが出てきます。こんな症状を持っている人が、皆さんの周りにはいるのでしょうか？きっと、普通の人にはこんな症状を持っていないでしょう。しかし、私の周りには、もう1人、弘大の卒業生で、バッタアレルギーの人がいます。弘大を卒業した私が、どうしてバッタアレルギーになったのか、私のこれまでの人生を紹介したいと思います。

私は、幼い頃から虫とたわむれて育ち、手にしたファーブル昆虫記に胸打たれ、物心つく頃には、将来は昆虫学者になりたいと強く思うようになりました。そして、昆虫の研究するために弘大に入学し、環境昆虫学研究室の安藤喜一先生（現名誉教授）のご指導のもと、イナゴの研究を行いました。3年生の秋に研究室に配属されてからの大学生活は、毎日がパラダイス銀河でした。実際の研究活動は、イナゴが産んだ卵の数を数えたり、成虫の脚の長さを測定したりと、決して華やかなものではなく、地味で単純な作業の連続でした。しかし、そんな研究活動も、私にとってはエキサイティングでした。新しい発見をする度に、喜び勇んで安藤先生に報告に行きました。しかし、大抵のことは先生がすでに気づかれて、しかも詳細に調べられており、ガッカリすることもしばしばありました。先生は昆虫のことは何でもご存知で、研究に取り組むひたむきな姿は、まさに夢に抱いていた憧れの昆虫学者像そのものでした。安藤先生の計らいもあり、私は、一連の研究の過程で、昆虫の神秘さに数多く触れ、それに魅せられて、次第に昆虫の研究のとりこになっていきました。そして、さらに研究を続けていきたいという思いが日増しに強くなり、大学院への進学を決意しました。しかし、安藤先生が退官されてしまうため、弘大には残らず、他大学への進学という道を選びました。

低密度飼育



高密度飼育



図1 サバクトビバッタ幼虫の体色多型

昆虫の研究を続けるぞ！ そんなやる気とは裏腹に、大学院受験に失敗した4年生の夏。現実には厳しいものでした。昆虫の研究室は全国に数多くあるものの、自分の続けたい研究テーマとマッチした研究室を見つけることはなかなかできず、途方に暮れました。差し迫る卒業。研究者への道が閉ざされてしまうのか、という不安から、枕を涙で濡らす日々が続きました。そんな状況を打開すべく、情報を求めて、秋に富山県で行われた学会に参加しました。懇親会の会場で、数名の大学の先生からお話を伺いましたが、残念ながら有益な情報は得られませんでした。もはやあてもなく、これまでか、とうなだれて、一人ネオン街を歩いて帰る時、ふと顔をあげると、ひときわ楽しそうな集団が目に見え込んできました。その中にちょうど顔見知りが出て、なんでも、学会賞を受賞した田中誠二博士の祝賀会をやるとのことでしたので、私も参加させてもらうことにしました。田中博士に自己紹介し、昆虫の研究をしたいけれど先行が無くて困っている旨を伝えると、即座に「僕のところに来て研究しないか？」と聞いていただけなのです。世界にその名が轟く田中博士からの、思っても見なかったオファーに対して、私は即答で、是非とも一緒に研究させて頂きたい旨を伝えました。見ず知らずの学生を快く受け入れてくださった田中博士は、実は弘大の卒業生でした。田中博士は、茨城県つ

くば市にある農業生物資源研究所で研究をされており、私はその近くの茨城大学に籍を置き、研究所で実験をすることになりました。この偶然の出会いから、私の第二の研究生活がスタートしました。

研究所では、カブトムシ、カメムシ、ゴキブリ、シロアリ、ハエ、カなど、様々な昆虫を対象に研究している専門家が集結しています。田中博士はここで、色々な種類のバッタを研究しており、弘大でバッタと近縁なイナゴを研究していた私にとっては願ってもない研究対象でした。私が担当したのは、アフリカ産のサバクトビバッタです。このバッタは、その名の通り、半砂漠地帯に生息しており、現地ではしばしば大発生して、大移動しながら次々と農作物を襲う深刻な害虫として世界的に知られています。わざわざアフリカからこのバッタを輸入して研究をしようとしたのには大きな理由があります。彼らは混み合った環境下で育つと、体色や体型、行動などを劇的に変化させる「相変異」という現象を示すのです。サバクトビバッタの幼虫は、通常の下では緑や茶色（図1左）ですが、高密度下で育つと黒くなり、さらに黄色やオレンジが混じった目立つ色彩になります（図1右）。また、高密度下で育った幼虫は、通常の個体よりも相対的に翅が長くて脚が短い長距離飛行に適した体型の成虫となり、一日に100km以上も飛行する



ことが可能になります。この相変異は、生物学的に非常に興味深い現象であるだけでなく、大発生に密接に関連していると考えられています。そのため、バッタの相変異は、前世紀の初めから様々な研究が成されてきており、これまでに数万報にも及び論文が発表されています。しかしながら、その本質的なメカニズムに関しては、依然として謎のままです。私はこの話を田中博士から伺い、自らの手で相変異の謎を解明して、バッタの大発生を阻止し、アフリカの人々を飢餓から救いたい、という思いが沸き起こり、サバクトビバッタの相変異がどんなメカニズムで制御されているのかを研究することに決めました。

バッタの相変異について研究するためには、バッタを大量に飼って実験をする必要があります。飼育室は、バッタに好適な32℃という高温で一年中維持されています(図2)。バッタは大食漢で、毎日自分の体重と同じくらいの草を食べます。そのため、広大な圃場で、バッタの食欲を満たすために大量の草を栽培する必要があります。1日おきに20kgほどの新鮮な草を刈り取ってきては、バッタ達に与えています。予想以上に過酷な重労働でしたが、幸いにも、私はイナゴの研究をした経験があったのでバッタの飼育にはすぐに慣れ、さっそく実験を開始しました。

高密度下で発育したバッタの体が黒くなる原因については長年の謎でしたが、田中博士らによって、バッタの脳で合成されるコラゾニンと呼ばれるホルモンが、バッタの黒化を誘導していることが突き止められ、世界的に大きな注目を集めました。ちょうどその頃、研究室にやってきた私は、コラゾニンの機能をさらに詳しく調べるため、低密度下で飼育している緑色のサバクトビバッタの幼虫にコラゾニンを注射してみました。すると、このホルモン処理によっ

て、高密度で飼育したバッタに特有の成虫体型も誘導されることが判明しました。この結果は、コラゾニンがバッタの大発生において重要な役割を演じていることを示しています。私たちは、この発見を論文にまとめて海外の学術雑誌に報告し、世界の研究者に紹介しました(Maeno et al., 2002; Maeno & Tanaka, 2002)。

田中博士の全面的なサポートもあり、その後もサバクトビバッタの相変異に関して次々と興味深い発見をする事ができ、さらに研究を発展させるため、神戸大学の博士課程に進学して、現在もつくばでの研究生活を続けています。神戸大学の指導教官の竹田真木先生もなんと弘大の卒業生で、田中博士同様、当時の昆虫学研究室の教授だった正木進三弘大名誉教授を慕って、弘大に進学したそうです。私は、毎日バッタの世話や実験をして、彼らと触れ合っているうちに、気がついたらバッタアレルギーになっていました。私にとってこのバッタアレルギーは、バッタ研究者の証しであ

り、とても誇りに感じています。

最近、関西国際空港でトノサマバッタが大発生してニュースになりました。日本では、こうした現象は非常にまれですので、恐らく皆さんは、バッタの大発生を目の当たりにした事はないと思います。しかし、アフリカでは、バッタが空と大地を埋め尽くし、地上の緑という緑を食べ尽くすほど大量に発生することが今でもあります。竹田先生が空港に交渉して下さり、私は田中博士と一緒に竹田先生に同行して、黒く変身したバッタを滑走路のど真ん中で目撃することができました。弘大の卒業生で、もう1人のバッタアレルギー保持者である田中博士とともに、これからもバッタ研究を続け、相変異の謎を完全に暴くことが出来れば、アフリカの人々がバッタの脅威から解放される日が来るかもしれない、そんな日を夢見て、私たちは腕にバッタの足跡型のジマシムという勲章をつけながら、日夜研究に没頭しています。

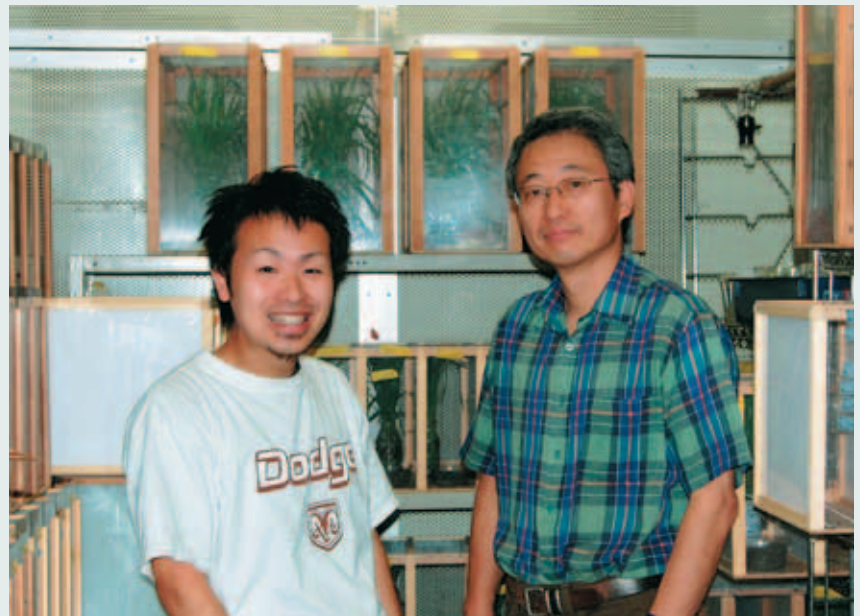


図2 サバクトビバッタの飼育室にて 左、著者； 右、田中誠二博士

## 主体性を持って行動を！



弘前大学 医学部  
附属病院 看護師

阿部 朋子

(看護学専攻 2005年卒業)

医学部保健学科看護学専攻の第1期生として卒業してから、2年が過ぎました。

現在、私は弘前大学医学部附属病院で看護師として勤務しています。主に糖尿病のある方を対象に看護を提供する毎日です。合併症を持っているために入院される方、糖尿病と上手に付き合っていくために教育入院される方がいらっしゃるの、糖尿病患者の看護と言ってもその形は様々です。対象となる方によって必要とされる看護・ケアは異なるため、一人ひとりの方に合った看護ができるように心がけています。毎日の看護実践では、自分の至らない点に気づくことがたくさんあります。何に関しても一つひとつが勉強なのは、看護師になって3年目の今でも変わりません。通常の業務以外に専門職としてやるべきこと、学ぶべきことも多く、自分の課題といかに向き合うかが重要な時期に差し掛かっています。色々大変なこともあります。今はこの仕事に就いてよかったと考えています。

学生の皆さんは、自分が学びたいことを学んでいますか。今の学生生活は楽しいですか。

私は入学した当初、大学はとてつもらないところだと思っていました。1日の大半を占める授業時間のほとんどがとてつもらない面白くない上に、ただ時間だけが長く感じられるものが多かったからです。学生生活に楽しさを見出す

ことができないままに、ただ授業を受けている毎日でした。それに加えて、地元を出て弘前に来た私には、環境や文化、言葉の違いに戸惑うことも多く、一時期は弘前に来たことを後悔しました。

状況が一変したのは、ワーキンググループの活動に参加したことがきっかけでした。

第1期生として入学した私たちの学年は、何もかもが初めてのことで、授業・実習体制なども含めて本当に全てが手探りといった状態で、学生と教員が協力して基盤を作り上げていこうという雰囲気が強くありました。学年が進むにつれて、私たち学生の主体性も増し、発言する機会も多くなってきました。現在も行われているFDフォーラムがそのよい例だと思います。

看護学専攻では、実習で着用するユニフォームのデザインや、実習費用の負担方法、卒業研究発表会の運営などについて、それぞれワーキンググループを作り、担当の教員と一緒に活動していました。

大変だったのは、クラスの人数が多いので、意見がなかなかまとまらなかったこと、学生の参加状況も個人によって違うことです。その他にも、予算や物品が少なく困ったこともありましたが、工夫を凝らすこと、協力すること、時には教員に相談・交渉することで問題解決してきたように思います。

自分たちの意見を反映してもらいながら、カリキュラムに沿って学んでいくというのは、あらかじめ決められた道のりを進むのとは違い、大変なこともたくさんありました。しかし、迷い、苦労し、力を注いだ分だけ、その成果が出たときは達成感があり、ワーキンググループの活動はとてつもらなく、楽しい充実したものでした。新設された学科だからこそ

経験できたことであり、とても貴重な時間だったと思います。一つのことをするにも前例が何もないので、自分たちが意見を出すことは、それ自体が基盤となり、伝統の一端となっていくわけですから、何をすることも十分に話し合って建設的な意見が出せるようにしました。また、結果がより良いものとなるように、私たち学生も責任を持って行動するように心がけていました。

主体的に活動すること、新しく何かを作り上げていくこと、お互いの意見を出し合い、協力することの楽しさを学んだ4年間でした。偶然にも第1期生として入学したことが、自分の学生生活にこんなにも大きな影響を及ぼすとは思っていませんでした。自分でも思いもよらないできごとがたくさんありました。

私たちが手探りながらも先生方とともに基盤を作った保健学科も完成年度を迎え、現在はカリキュラムの改正や実習体制の見直しが行われているかもしれませんが、そこにも学生の意見が反映されていることと思います。

4年間または6年間の学生生活をどのように過ごすかは、本当に自分次第です。学びたいことをとことん追求したり、大学の長い休みを利用して、学生のうちにしかできないことをしたり、部活動やサークル活動に打ち込んだり、と選択肢はいくつもあります。

学年が進むと、授業や実習で忙しいとは思いますが、社会人になると、もっと時間がありません。本音を言ってしまうと、学生の皆さんが持っている時間がうらやましく思えることも多々あります。「今」だからできることを大切にして、学生の皆さんが社会に出るまでの間、思い切り楽しい時間を過ごせるように、卒業生として心から応援したいと思います。

# 後輩に伝えたいこと



弘前大学大学院  
保健学研究科

澄川 幸志

(作業療法学専攻 2005年卒業)

在校生の皆さんはじめまして。私は弘前大学医学部保健学科作業療法学専攻の第1期の卒業生です。作業療法というものが全くわからないままこの弘前大学に入学、卒業して、早いものでもう3年目になりました。今回、学園だよりの特集は、「卒業生から在校生へ」とのことですが、各学生のカリキュラムは各学部・専攻により異なっており、すべての学生に合ったアドバイスが思いつかないというのが本音です。そこで、作業療法学専攻に的を絞って、私自身の大学生活の経験から作業療法を実践するにあたって必要だと考えていることについて述べていきます。

その前に、作業療法について簡単に紹介します。作業療法とは身体または精神に障害のある者、またはそれが予測される者に対してその主体的な生活の獲得に必要な諸機能の回復・維持および開発を促すため、作業活動を用いて治療、訓練、指導および援助を行う職業であり、リハビリテーションの一翼を担っている職業です。

私が、この作業療法を実践するにあたって必要だと考えていることが2つあります。それは、「コミュニケーション」と「時間の使い方」です。

まずは、「コミュニケーション」について述べます。作業療法というのは「作業療法」というサービスを「利用者」に提供する職業であり、いうまでもなく、接客業です。接客業である以上、コミュニケーションが必要になります。学生の皆さんも学校やアルバイト先などでいろいろな人と接し、コミュニケーションをとる機会が数多くあると思いますが、実際の作業療法の場面では、一口にコミュニケーションといっても重要な意味があります。コミュニケーションを

通して実際の生活に関する情報を当人から得るだけではなく、検査・測定を行う際に対象者の理解力に応じた的確な指示を与えることが求められてきます。また、作業療法を進める上で重要となる二者関係を確立するには、対象者を安心させ、リラックスさせる環境を自ら演出する必要があり、そのための一手段としてもコミュニケーションが必要になります。さらに、チーム医療を実践するうえで、他の医療スタッフと必要な情報のやり取りを行うためにもコミュニケーションが必要です。このように、作業療法士として働くためには年齢、性別、職種に関係なく、幅広く多くの人と接することのできる「コミュニケーション能力」を身につける必要があるといえます。私は、この「コミュニケーション能力」というのは、教科書や参考書を読めば身につくというものではなく、より多くの人との会話、交流を通じて身につくものであると考えます。私自身、大学入学前は人と会話するのが好きではなく、コミュニケーションを多くとる人間ではありませんでした。しかし、学生時代にはクラスメイトだけではなく、アルバイト先の人をはじめ多くの人と会話、交流をし、接する機会がありました。この学生時代に多くの人とコミュニケーションをとった経験が今の臨床での業務に大変役立っています。

次に「時間の使い方」について述べます。作業療法学専攻は学年が進むにつれ講義よりも実習・実験の授業数が増えてきます。特に3年次、4年次には講義よりも実験・実習がほとんどになります。講義は時間どおりに終わることが多いのですが、実験・実習は時間内に終わることのほうが少ないです。まして、4年次の臨床実習となると、レポートの作成や調べ物をプライベートな時間を削って行うことになります。学校のことでプライベートな時間が短縮されるというのは、私自身を含め多くの人にとって好ましくないことだと思います。このような時に、私は「時間の使い方」が重要になるのではないかと考えます。人のライフスタイルは様々であり、個人によっていろいろな都合がありますが、多くの方は大学を4年間で卒業し

ます。この4年間は、日にすると1461日、時間にすると35,604時間であり、誰もが「同じ長さ」です。この「同じ長さ」の時間で、勉強したり、部活動・サークル活動をしたり、アルバイトをしたりということになります。よく「時間が無い」という台詞を耳にしますが、同じ学部・専攻の大学生として同じカリキュラムで生活している限り、大学生として時間割上で与えられた時間は皆同じです。学生である以上、大学のカリキュラムを優先して行うべきであり、アルバイトや部活動、サークル活動を行う時間、つまり「自由に使える時間」を増やすためには、自ら作り出すことが必要になると考えます。自分が置かれている現状をよく理解し、自分がどのようにすれば最も効率的であるかを考え、行動することで「自由に使える時間」というのは増えます。大学生時代に加えて私自身作業療法士として働きながら大学院に通うという生活をしてきたこともあり、「自由に使える時間」をいかに作り出すかに四苦八苦しました。作業療法士としての仕事のみを考えても、「同じ長さ」の時間しかない状況でより多くの対象者に、より良いサービスを提供するためには、「時間の使い方」を考え、対象者に無駄なく、スムーズに治療を進めることが求められます。

以上が、私が作業療法を実践する上で必要だと考えていることです。これを参考にして、無為に学生時代を送るのではなく自分なりに将来作業療法士として働くためには何が必要かを考え、学生生活を送っていただきたいと思います。

最後に、先ほども述べましたが、私は作業療法士として勤務するほかに大学院に進学し研究を続けてきました。大学院に進学した理由は、4年次の臨床実習や卒業研究において疑問があり、その疑問を解明したいと思ったからです。私は、大学院は研究を通して事象の捉え方や考え方を学ぶところだと考えます。この事象の捉え方や考え方というのは、作業療法を実施するうえでも重要になってくることです。後輩の皆さんもぜひ大学院へ進学し、事象の捉え方や考え方を学んでいただきたいと思います。

## 卒業生から見た弘前大学

弘前大学大学院 医学研究科

川口 英夫

(2002年卒業)

今回「卒業生から見た弘前大学」という原稿依頼を受けましたが、実は今自分は弘前大学大学院医学研究科に属する学生であり、しかも大学病院に医員として就職し、診療や学生への指導を行っています。現時点では卒業には程遠く、どっぷりと弘前大学に漬かっております。そんな状態ですので、医学部医学科や保健学科の学生に接することがあります。

自分が学生の頃と比べて一番感じることは、学生の質が昔より格段に良くなっていることです。自分が学生の頃は日々の授業をいかにこなすか、いかに単位を楽に取るかということに重点をおき、テストは一夜漬け、教養課程後半の単位が厳しくなると半ばスタンプラリー状態で駆け巡っていた気がするの

ですが、今の学生にはそのような危うさは見られません。

医学科の2年生に「どんな癌を知っていますか?」と聞いても、次から次へと答えが返ってきます。自分が学生の頃など肝臓が右にあるのか左にあるのかもわからない状態だった気がします、そんな自分も今となっては学生に偉そうに教えているのだから不思議なものです。

医学科で見れば、学士編入の存在も大きいと思います。目的意識が強く、向上心があり、接してこちらもとても刺激になります。その強い目的意識を青森県の医療のために使ってくれることを強く期待しております。

残念ながら最近は文京町に顔を出すことがほとんどありません。さすがに30歳を過ぎますと、文京町に入ることためらいが生じてしまいます。昔は学食にビールがあったのですが、今も健在なのでしょうか? パバシューやサラ

夕奴、ピリ辛丼も懐かしいソルフードです。

ところで、いろいろ御意見があるかと思いますが、自分は弘前大学の存在意義は「地域に優秀な人材を供給する」ことだと思います。自分の高校時代の同級生も、弘前大学の各学部を卒業して、今では県警、市役所、水道局、エコレンジャー(レッド)など県内で様々な職に就いております。自分の父も弘前大学教育学部出身で、県内で教職を拝しておりました。

現在、大学独立行政法人化で厳しい波にさらされていると思いますが、地道にやるべきことを行えば、地域の方々はず見てくれていると思います。世界の前にまず日本、日本の前にまず県内です。これからは弘前大学には地域のため、優秀な人材を育成してもらえればいいな一と思います。

## 卒業生から見た弘前大学



国立国際医療センター  
研修医

瀧 端正博

(2007年卒業)

「学園だより」に初の寄稿となります。まだ卒業して半年にもならない国立国際医療センター(以下、IMCJ)研修医の瀧端です。この度「卒業生から見た弘前大学」というお題を頂きましたので、夜のNHK教育テレビ「視点・論点」風に私の意見を述べさせて頂きます。

弘前は日本地図上、小さな一地方都市に過ぎません。しかし、合併後も実は人口18万人という都内の一区にも負ける人口数でありながら、GWの桜祭りでは日本一となる約200万人もの人手を集め、また「洋館とフランス料理の街ひろさき」の名の通り、実は単位人口当たりのフランス料理屋とパティスリーの数

が日本一というハイカラさを誇っています。さらに「りんご一個で医者いらず」と言われる割には、弘前は人口10万人中約400人と全国平均の約2倍の医者数を誇り、実は隠れた「お医者様の街ひろさき」で我々は育てられてきたわけです。

対して私のいるIMCJは、国の関係者から国籍不明の外国人まであらゆる層の患者が集まり、またそこで働く研修医も日本全国から集結したまさしく「人間のサラダボウル」と言えるような環境が形成されています。

この極端な2つの環境を比べたとき、一体何が見えてくるのでしょうか? 私は弘前大学の最大のメリットは、小さな学園都市の特徴を生かして学生及び教員が公私ともに家族のように育てられるということにあると思います。どこの店に行っても顔見知りに出食わし、車を見ただけで中の人誰かわかり、挙句の果てに噂だけは所狭しと駆け巡るプライベート筒抜けの環境は、実は大都市の大学ではなかなか見られるものではありません。終電を気にせずお酒が

飲め、飲み足りなければ続きは誰かの家でという環境は非常に恵まれているということに気付くべきです。

しかし、そのような密な環境で育った家族もいつか離れるもので、弘前大学で育った子供たちも卒業を機に親元から離れていきます。同じ親元にいた兄弟姉妹もそのうち疎遠になり、誰がどこにいるのか、また何をしているのかもわからなくなります。古巣の青森にいらまだしも、アウェイの土地に出たときの卒業生同士の繋がりのなさを実感することが時々私にもあります。

遠く離れても我々のアイデンティティを確認する方法はないでしょうか? IMCJにアイデンティティを感じる同期の研修医たちは「IMCJ」ロゴ入りの白衣を作りました。弘前大学でもBSLや卒業時にロゴ入りの白衣をプレゼントすると面白いかもしれません。

9月半ば、夕飯を散々食べさせてもらった友人の結婚式に参加するため、久しぶりに弘前に帰ります。たまには古巣に戻ることで、弘前大学のアイデンティティを感じようではありませんか。

# Ⅲ 研究室紹介



## 医学研究科

### 法医学講座

黒田 直人

現在の法医学講座は、教授（専門：法医学解剖）、講師（専門：免疫学）、助教（専門：法医学解剖・小児虐待）、技術補佐員各1名の計4名で運転しています。平成20年3月の竣工を目指して総合研究棟改修工事が行われている真っ只中、3つのフロアに分かれての仮住まいではありますが、メンバーの結束は堅く、教育、研究、実務に全力を尽くしています。

卒前教育では、21世紀教育のテーマ科目「医療」と「基礎ゼミナール」、医学科専門科目の「基礎人体科学演習（第1学年）」、「医の原則Ⅱ」（第2学年）、「研究室研修」（第3学年）、「法と医療Ⅱ」（第4学年）、「pre-BSL（血液型検査実習）」（第4学年）および「クリニカルクラークシップ」（第6学年）と、多くの学生さん達の指導を担当しています。現在当講座には大学院生はおりませんが、卒後教育でも大学院講義や基礎実験に参加する体制を維持しています。

研究面で最近際立っているのは、高度死後変化死体におけるABO式血液型迅速判定に関する研究です。従来一昼夜以上の時間を要し、しかも結果の安定性に些か問題のあった解離試験法に代わるものとして、短時間で信頼性の高

い検査法を確立しつつあります。北武講師の率いるこの研究は、当講座第二代教授、故赤石 英（あかいし すぐる）先生の考案した型的二重結合反応法を応用したもので、当講座の伝統を受け継ぐ重要な研究として成就しようとしています。

DNA全盛の現在、なぜABO式血液型なのか、と疑問をお持ちの方々も多いことと思います。誠に残念なことです。司法から報道に至るまで、DNA検査（「DNA鑑定」という呼び名は一部を指すもので、一般的には正しくありません）の意義を正しく理解している人達は意外に少なく、DNA検査がABO式血液型検査を凌駕していると誤解されている場合が多いようです。ABO式血液型検査は、口腔内所見（よく「歯型」と呼ばれますが、これも不適切な表現です）と同様、多数の身元不明遺体と多数の候補者とを照合させる場合の初期段階においては極めて有用な方法で、時間的、経済的および人員と労力の面から、DNA検査が到底及ぶものではありません。DNA検査は、最終的な確認の段階で用いるべきものであり、これを最初から導入するのは誤った手順と言えます。

さて、法医学講座の重要な業務として、法医学解剖があります。青森県内で発生する異状死の1割未満に過ぎませんが、それでも年間100例を超える司法解剖・行政解剖を一手に引き受けています。平成18年からは、医学科学生および研修医の指導を目的とした、死体検案業務にも参加するようになり、異状死の検案業務教育にも力を注いでいます。死体検案業務は、異状死体の外表検査と医学的情報収集などを主とした医師にしかできない業務ですが、我が国では非常に軽んじられてきた（と言わざるを得ない）職務です。死体検案は、概してとても難しい仕事で、その判断は残された人々の一生を左右しかねない、大きな責任を負わされているものです。したがって、卒前卒後医学教育の中に取り込むのはむしろ遅きに失した感がありますが、遅時きながらも当法医学講座では正式な講座の業務としてこれに着手したものです。

法医学講座では、いつどのような事例の鑑定依頼が飛び込んでくるかわからないという状況の中、少ない人員で地域の治安維持のため、身を粉にして働いています。これからもどうか暖かい目で見守っていただければと思います。

#### 死後数ヶ月を経過した死体骨粘膜炎からの型的二重結合反応による血液型判定の例



感作用シャーレに胃粘膜炎塗布ガーゼ単繊維（処置済み）を入れる。

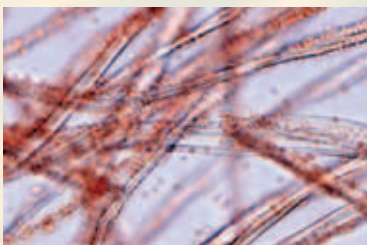


検体線維片に抗血清を添加し感作

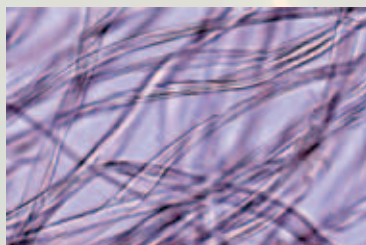


対応する血球を感作中

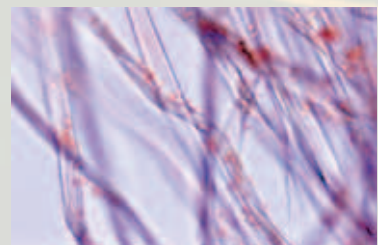
鏡検により、繊維への血球の付着状態からA型と判定される（全過程の所要約2時間）。



抗A+A型血球



抗B+B型血球



抗H+O型血球

## IV 海外だより

# 滞

# 在

# 記

理工学研究科  
総務グループ  
藤寄里美



UT Martin

**私**はアメリカのテネシー州、マーティンに2ヶ月間滞在していた。マーティンはメンフィスから車で約3時間北東に行ったところにある小さな町である。半径2.5kmの円形状の町を取り囲むようにハイウェイが走っており、町の中心部を1本の州道が貫いている。州道沿いには、ファストフード店やチャイニーズ・レストラン、日用品から食品まで取り揃えた大型量販店が点在している。公共の交通機関は一切なく、町に入るのも、町から出るのも車しか方法はない。生きるのに必要な物は手に入る、という町だ。

キャンパスはほぼ町の中心にあり、南北に長い長方形の形をしている。北に行けば牧場が広がり、東に行けばダウンタウンに着く。キャンパス内の小道のついた小さな芝生の広場には、いろいろな種類の木が植えられており、その時期多くの木が黄葉していた。片隅にある小さなもみじの木も紅葉らしく色づいていた。平日には授業へと急ぐ学生が多く行き交うが、週末はひっそりと静まり返り、リスの鳴き声が響き渡

る。晴れた日は太陽が降り注ぎ、雨の日は小道を滝のように水が流れる。雨の日は靴が濡れて、替えの靴のない私はかなり閉口した。

授業は大学の講義形式だった。教壇に座り教科書とは全く関係のない話をする先生もいたし、生徒にやる気ないと嘆く先生もいた。朝一番で文法の小テストを受け、昼前には英作文を書いた。英作文は教科書に沿った題材を与えられた。ある日は「女性蔑視の言葉について」、別の日は「アメリカの風習に似た自国の文化」という具合である。午後一番にある発音の授業ではクリスマスの歌を皆で歌った。発音の練習になったかは分からないが、クリスマスの歌が沢山あることを知った。

授業が終わるとほぼ毎日ユニバーシティ・センターに行った。校舎を出て、もみじの木の傍らから真っ直ぐにのびている小道を歩き、芝生の広場を抜ける。校舎の谷間を進み、大型バイクの止まった駐車場の脇を通り過ぎるとユニバーシティ・センターが現れる。ユニバーシティ・センターは図書館より南側の一段低く

なった場所に建っている。一階にはカフェ・テリアやジム、コンピュータールームがあり、2階にはブックストアやラウンジがある。カフェ・テリアの入口には、営業時間中、その時々3種類のおすすめ料理が飾られていた。料理は、コールドディッシュ、ホットディッシュ、トラディショナルの3種類であり、主なコールドディッシュはトルティーヤにレタスやアボガドや鶏肉を巻いたもので、ホットディッシュはトマトソースとたっぷりの粉チーズをからめたパスタだった。トラディショナルは、ほうれん草のバター煮やローストビーフのグレービーソースがけコーンブレッド付、というようなサンクスギビングの料理を彷彿とさせるものであった。

私は毎日決められたように、1階にある小さな店で86¢のイタリアン・カプチーノを買い、2階のラウンジでパソコンをいじっていた。イタリアン・カプチーノは頭が痛くなるほど甘かったが、なぜか私は買い続けた。そして夕方5時過ぎまで必ずラウンジにいた。



**マ**ーティンに住むようになって2週間ほど過ぎた頃、先生から一組の夫婦を紹介された。その夫婦はかつてボランティアでホストファミリーをしており、他の国の文化や風習に大変理解があった。彼らはマーティンから車で30分ほど北にあるケンタッキー州のフルトンに住んでいた。夫のJは家をリフォームして売却する仕事を自営しており（アメリカは古い家の方が価値が高くなる傾向がある）、妻のVはリフォームを手伝っていた。Jはかつて1ドルで家を購入し、リフォームして60万ドルで売却したことがある。購入した家を大型トラックに乗せて眺めのよい湖畔に運び、予め作っておいた基礎に家を設置する。上下水道を配管し、屋根を緑色のタイルに張替え、外壁と内壁を淡いクリーム色に塗装し、玄関前に木のテラスを作る。約3年間費やしてリフォームを完成させた。Vはとてもその家を気に入っていたので、最後まで売却することを渋ったらしい。今でもその家が一番のお気に入りだと言っていた。

2人と知り合ってから私の食生活は潤った。彼らは事あるごとに私を家に招待し、食事を振舞った。私がパンが好きなことを知ると、Vは毎回手作りパンを用意して待っていた。私がレシピ本から食べたいパンを選びVに伝える。私が来る日に合わせてVはパンを作る。いろいろな種類のパンを私は食べることができた。イタリアン・ブレッドはオリーブオイルが入ったベーシックな味のパンで、バターミルク・ブレッドはバターミルク独特の酸味の強いパンである。バターミルクはクリーム色のとろりとした液体で、ヨーグルトに溶かしたバターを混ぜたような味である。パンプキン・ブレッドはパウンドケーキに似た、しっとりして甘いパンである。シナモン・ブレッドは、シナモンのきいたふかふかしたほのかに甘いパンで、私はこのパンが一番好きだった。

寮のベースメントにはキッチンがあり、寮生が自炊できるようになっていた。ただ、調理器具はなく、冷蔵庫は冷えすぎて、電子レンジは食

品を暖めるのに2倍以上時間がかかった。平日は8時から22時ぐらいまで自由に使用できたが、週末は鍵がかかっていてスタッフに頼まないと使用できない状態だった。このキッチンを利用するのは、数名の留学生と寮の清掃員だけであったが、私はその方が都合がよかった。

Nとは寮のベースメントで偶然再会した。Nはテレビを見ながら食事をしており、私は洗濯物を取りに行く途中だった。以前、先生にNの紹介を受けていたが、その後は見かけることがなかったのうやむやになっていた。Nは「同じ寮に住んでいることを知らなかった。私はランチ・タイムと今の時間はベースメントで食事をしているから、またいつか一緒に食事をしよう。」と言った。私は次の日のランチ・タイムにベースメントに来ることを約束して、その日は別れた。

それ以降、Nと奇妙な協力体制が出来上がった。私は食事会などで残った料理を持って帰る。Nは手に入る材料で日本食を作る。お互いのもっている料理を交換する、という具合だ。私がもらってくる料理は、典型的なアメリカ料理が多かった。30cm×40cmの長方形のアルミホイルの容器に茹でたパスタを敷き詰め、パスタが隠れるぐらいトマトソースを注ぎ入れる。その上に衣をつけて揚げたチキンをのせ、全面を覆うようにピザ用チーズをかける。チーズが溶けてきつね色になるまでオーブンで焼く。この料理はイタリアンだとあるアメリカ人が言っていた。もどき料理が多いマーティンでは、Nの作る日本料理は本当にありがたかった。

平日のランチ・タイムはいつも同じ顔ぶれだった。私とNと寮の清掃員達。清掃員達は毎日同じメロドラマを見ていた。兄嫁に義弟が恋をする。兄嫁は苦悩しながらも義弟に魅かれていく。その事態を知った義弟の恋人が、夫に義弟との情事をばらす、と兄嫁を脅す。Nと私は、同じようなストーリーのドラマはどこにでもあるんだ、と妙に納得しながら見ていた。

**J**が初めて私を招待したとき、家の近所を案内してくれた。私と並んで歩きながらJはこう言った。「この付近に住んでいる白人は僕たち夫婦2人だけだよ。でも、近所の人達はとても親切だし、僕たちを受け入れている。倉庫に鍵をかけなくても何も盗まれないぐらい治安はいいしね。」そして、Jは腕を胸の前で交差させ、両手の親指と人差指と中指をかるく曲げて立て、ニヤリとした。

Jの趣味は家探しである。条件の良い物件を見つけ購入するのだ。私は一度、Jの趣味に付き合ったことがある。Jは私を“お気に入りの家”に連れて行ってくれた。大きくなりすぎた木で覆われた家は、玄関の鍵が壊れ、窓が割れていた。昼間でも薄暗い室内は、物が散乱していた。Jは慣れた足取りで室内に入り、散乱した服や人形を器用に足でどけながら奥の部屋に進んだ。私が室内に足を踏み入れようとしたとき、Jは私の方を向き「所々床が腐っているから僕が通った場所以外に行ってはいけないよ。」と言った。部屋の壁には落書きがあり、電気コードはむき出しで、洗面所の床は抜けていた。2階は1階より若干ましだったが、人から見放された家独特の重苦しい空気が漂っていた。Jは仕事のしがらみがある、と言っていたが、結局この家は買わなかった。

**私**が日本に帰国してからマーティンではいろいろあった。JとVの飼っていた黒猫のトムは車に轢かれ、JとVはケンタッキー州の北の端の町に引っ越し、Nは大学院で勉強を始めた。マーティンはびっくりするほど暑くなり、町唯一のKFCはつぶれた。

Jからは時折、アメリカン・ジョークが書かれたメールが届く。私は少しジョークが分かるようになった。短期でもアメリカ生活は悪くないかもしれない、と思う。

滞在期間(2006年10月18日~2006年12月15日)  
滞 在 先(テネシー大学マーティン校)



# V けいじばんコーナー

## 平成19年度 学生ボランティア活動助成



平成19年度学生ボランティア活動助成の募集について7件の申請があり、下記の団体が承認されました。選考結果の通知は平成19年6月20日（水）に和田学務部長から須藤副学長室において交付されました。

団 体 名	申請代表者	団 体 名	申請代表者
児童文化研究部 (KIDS')	今 怜 奈 (理工学部)	SaBoTen (サボテン)	山 田 哲 也 (人文学部)
僻地教育研究会	森 健 太 (教育学部)	環境サークルわどわ	浅 水 優 太 (人文学部)
さくらボランティア	恩 田 真 人 (理工学部)	青森家庭少年問題研究会学生部会	村 山 彰 彦 (人文学部)
ひまわりサークル	石 原 沙央里 (医学部保健学科)		



## キャンパスツアー

7月18日(水) 13:00よりキャンパスツアーに蟹田中学校の生徒27名、教諭2名が参加しました。

今回は理工学研究科2年・齋藤美希さんと農学生命科学部1年・室崎文美子さんに学内の施設等を案内していただきました。

向かって左側から  
理工学研究科2年 齋藤 美希さん  
農学生命科学部1年 室崎文美子さん



## VI 編集後記

北国の短い夏を彩る弘前ねぶた、ご覧になりましたか？ 弘前大学としても毎年出陣していますので機会がありましたら是非参加してみてください。そのねぶたについて一言。

弘前ねぶたは扇型が主で、表面の鏡絵には三国志や水滸伝など勇ましい武者絵、裏面中央の見送り絵には虞美人のような女性、まさに動と静が一体となっています。そしてねぶたに付き物は囃子。進行、休み、戻りと状況に応じて囃子も変わります。その囃子を聴くともなしに聴いていた私の耳に飛び込んできたのはなんと涼やかな虫の音・・・もう秋・・・

さて、学園だより156号の特集は、「卒業生から在校生へ」です。各学部の先輩から在校生に向けてたくさんのメッセージが寄せられました。先輩方の現在の活躍は、弘前大学での4年間・6年間の学生生活が基盤となっており、自己発揮されて頑張っている姿勢に感銘を受けました。後輩へ寄せられた熱いコールに感謝申し上げると同時に、在校生の皆さんにはこれからの学生生活の糧にして頂きたいと思います。

(M.S)

# 広告

## 弘前大学生協は **KES** の認証取得に向けた活動を開始しました

KESとは「環境マネジメントシステム・スタンダード」の略称で、組織や団体が環境問題に関心を高め環境保全に取り組む状態を、審査機構が「認証」という形で評価する制度のことです。

生協では昨年より取得に向けた準備をしてきましたが、2007年7月理事会において認証取得活動のキックオフを正式に決定し「環境宣言」を発表しました。

### 弘前大学生協同組合 環境宣言

#### 基本理念

弘前大学生協同組合は、将来にわたり地球環境を守ることが私たち人類の重要な責務の一つであることを認識し、全力で環境負荷の低減に努力いたします。

#### 方針

弘前大学生協は、弘前大学の構成員である学生・院生・教職員の暮らしを支える事業活動を行っています。私たちは、こうした活動・商品・サービスの環境影響を低減するために、次の方針に基づき環境マネジメントシステムの継続的な改善を図りながら、地球環境との調和を目指していきます。

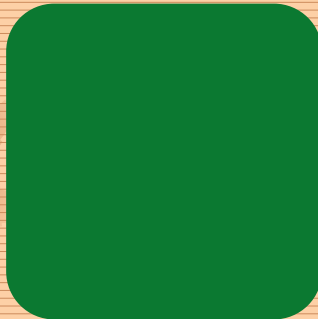
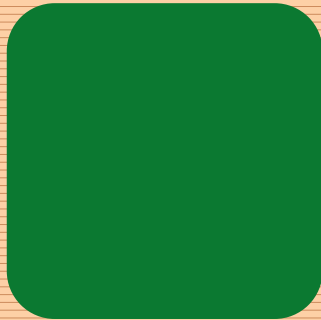
1. 環境関連の法規制、条例及びその他受け入れを決めた要求事項を遵守します。
2. 弘前大学生協の活動・商品・サービスに係わる環境影響のうち、以下の項目を環境負荷の低減のための重要テーマとして取り組みます。
  - (1) 活動、事業による廃棄物発生量の削減及びリサイクル率の向上
  - (2) エネルギーの使用量削減
  - (3) 水資源の使用量削減
  - (4) 事務用紙使用量の削減
  - (5) 弘前大学、弘前大生協の施設内及び周辺の清掃等啓発活動
3. 職員一人ひとりが、環境負荷低減活動をよく理解し積極的に実践できるように、この環境宣言の周知を図り、あわせて生協外へも公表します。そして事業の利用者でもある組合員と協同して推進していきます。

これらの方針を達成するために、目標を設定し、定期的に見直しを図るなどの環境マネジメントシステムの推進に取り組むこととします。

制定日 2007年7月26日  
弘前大学生協同組合  
理事長 荒川 修

弘前大学生協では2007年10月の審査請求と認証登録をめざし、組合員の皆様と協同して環境負荷軽減活動を推進していきます。そのために、レジ袋の削減とマイバッグの普及活動・弁当容器の回収率のアップ等について、学生が気軽に集まって話し合いや行動できる場（仮称：環境委員会）を設け、より多くの組合員の意見や声を活動に活かしたいと考えています。

上記委員会への参加方法、お問い合わせ先などについては店舗にポスターを掲示しておりますのでぜひご覧ください。また生協HPにてのご案内いたしますのでアクセスをしてみてください。



**弘前大学 学園だより** Vol. 156  
2007年9月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、  
下記のアドレスまでお寄せ願います。  
e-mail [jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp](mailto:jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp)  
弘前大学学務部学生課

国立大学法人 弘前大学  
「学園だより」編集委員会  
委員長  
氏家良博(教育・学生委員会)  
委員  
渡辺麻里子(人文学部)  
北原啓司(教育学部)  
松谷秀哉(医学研究科)  
鈴木光子(保健学研究科)  
遠田義晴(理工学研究科)  
比留間潔(農学生命科学部)  
笹森利通(学生課)  
石岡勝彦(学生課)  
印刷：やまと印刷株